

今日の聖書の箇所で、パウロはリストラというところで足の不自由な男と出会います。彼は生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがありませんでした。パウロは自分の話を熱心に聞いていた彼を見つめました。そしてパウロはそこで、この人がいやされるのにふさわしい信仰があるのを認めたので、彼に向かって、「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言います。すると、その人は躍り上がって歩き出しました。このように生まれつき足の不自由だった男がいやされた出来事を見て、その町の人々は、声を張り上げてこう言いました。「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」。

ギリシア神話が支配していた世界では、神と人間の区別はなかなかつきにくいものでした。力ある人、すぐれた人を神と称して崇拝することに、あまり抵抗はありませんでした。私たち日本の国でも、人間が神になるだけではなく、樹齢何千年という大木や大きな岩が神になったり、きつねが神になったりします。ギリシア神話が広まっていたこの世界でも、足の不自由な男をいやしたバルナバとパウロは、ギリシア神話の中に出てくる「ゼウス」と「ヘルメス」という神々に間違えられます。すると、バルナバとパウロは衣服を裂いてこう叫びました。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち返るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です」。我々もあなたがたと同じ人間に過ぎないのだ。バルナバとパウロは、必死になってそう語ります。人間を神にしてはならない。人が神に成り代わってはならない。生ける神はただお一人。天と地と海と、その中にあるすべてのものを造られた方。この方だけが本当の造り主、本当の神なのだ。バルナバとパウロはそう語るのです。

こうして地元のギリシア人たちの騒ぎをようやく治めた2人でしたが、19節からの箇所では、アンティオキアとイコニウムからやってきたユダヤ人たちが群衆を抱きこみ、パウロに石を投げつけます。かつてパウロがまだサウロと呼ばれていたころ、彼はステファノを石で打ち殺すことに賛成していましたが、今度はパウロがユダヤ人たちから石を投げつけられるはめになってしまったのです。神様の名のためにどんなに苦しまなければならぬかを、パウロはまさに体験したのでした。しかし、それは同時に喜びの体験でもありました。今日の聖書の箇所の少し後、14章27節には「神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した」と記されています。パウロたちは自分たちの苦しい体験を通して、苦しい時にこそ主が共にいてくださり、新しい道を開いてくださったことを確信したのでした。

さて、今日の聖書の箇所で、なぜユダヤ人たちは、わざわざアンティオキアやイコニウムからやってきてまでバルナバとパウロを迫害したのでしょうか。イエス・キリストを宣べ伝えていたバルナバやパウロに対して、はたしてわざわざ他の町からバルナバやパウロを追っかけてきてまで妨害をするのでしょうか。しかもバルナバとパウロは、このリストラという町で生ける神に立ち返るように呼びかけました。天と地と海とその中にあるすべてのものを造られた方に立ち返れと、天地創造の神に対する信仰の導きを行っていたのです。ユダヤ人たちにとっても、天地創造の神に立ち返れという話は問題なかったはずでした。

ではなぜ、ユダヤ人たちはわざわざ他の町からバルナバやパウロを追いかけてきてまで迫害したのでしょうか。

その理由は、ユダヤ人たちにとって、天地創造の神を異邦人に広めてほしくなかった。自分たちの神を、異邦人に広めることがいやだったのではないのでしょうか。ユダヤ人は、天と地を造られた神様から選ばれた唯一の民族、神の選民でした。それを他の異邦人たちに広めてほしくない。天地創造の神様、その救いは自分たちユダヤ人だけのものにしておきたい。そんな思いがユダヤ人の中にあったのではないのでしょうか。

自分たちは神に選ばれた人間。自分たちはすぐれた人間なんだ。人は簡単にそのような思いに捕らわれてしまいます。

今から26年前、2000年7月22日午前4時ごろ、高校生たち4人の若者が、大阪天王寺駅前商店街で野宿していた67歳のKさんを襲撃して暴行し、Kさんは内臓破裂で死亡しました。Kさんは釜ヶ崎で日雇労働者として仕事していましたが、不況と高齢の影響を受けて野宿生活に追い込まれていき、1ヶ月ほど前から段ボールハウスで野宿していました。襲撃した4人の若者は、2000年の始めから「ホームレスは臭くて汚く社会の役に立たない存在」、「格闘技ゲームの技を試し、日頃の憂さを晴らしたかった」と、「こじき狩り」と称して野宿者への襲撃を繰り返していました。「スリルがある」、「憂さが晴れる」といって集団化し、「かかと落とし」や「回しげり」などのゲームの技を試していました。

襲撃した子どもたちは、仲間関係の中で、他の友達から見くびられたくなかったとか、暴行することが強さだと思って襲撃に加わることが多かったようです。そしてもう一つ、彼ら自身がいじめられた体験があったり、社会や生活の中でストレスを感じ、ホームレスを襲撃することによって自分の存在を確認していたのではないかと、ということが指摘されました。襲撃した子どもたちの中に、スポーツ万能で人権標語で表彰された子もいました。彼はこれまで暴力事件を起こしたことは一度もなく、非行歴もなく、友達同士で殴りあったこともない子でした。

襲撃事件が起こるのは、夏休みや春休み、そして学校のテストの時期です。犯人は中高生や10代後半の若者で、男子グループという特徴が表れているそうです。襲撃をした子どもたちに共通して見られるのは、襲撃を肯定していることです。彼らは「何かをしなければ生きる価値がない」と考え、ホームレスの人たちを何もしないで生きている人たちと決め付け、「無能な人間を駆除する、排除する」と言って襲撃を行う。襲撃は社会の役に立っている。大人は自分たちを逮捕するが、本当は良くやったと思っているに違いない。そういう発言が出てきたそうです。彼らは現代社会が生み出してきた子どもたちです。ホームレスなんかいなくなった方が良くと考えている大人たちの思いが、子どもたちを襲撃へと向かわせたのではないのでしょうか。私も昔、福岡で野宿者におにぎりを配る支援活動を行っていたとき、見知らぬ男性からすれ違いざまに、「お前らみたいなのがいるから、ホームレスがいつまで経ってもいなくならないんだよ」と罵声を浴びせかけられたことがあります。そんな大人たちの思いを反映したのが、若者による襲撃事件でした。

「生産性のない人間が、迫害され差別されるのは当然」。ホームレスを実際に襲撃はしないけれども、ホームレスが迫害され差別されるのは当たり前だ、と考えている人はたくさんいます。これが現代の社会の状況です。この状況を何とか打開するためには、野宿者に

対する理解を深めること。教育が大切なのです。川崎では、すべての公立中学でホームレス問題を取り上げて教育を行った結果、襲撃が半分に減ったそうです。

確かに教育の問題は重要です。野宿者が生まれた社会的背景や、存在意義、有意義性などを教えていくことは大切なことです。「何もしなければ生きる価値がない」という人たちに対して、いや誰だって価値があるんだ、とその人の存在価値、存在意義を社会の中で認めていくことはとても大切なことです。けれども、たとえ社会の中で他の人たちから存在意義や存在価値が認められなかったとしても、天と地と海とそこにあるすべてのものを造られた神様にとっては、すべての人が大切な存在なのです。

福岡で野宿者の支援活動をしていたとき、私たちは希望を持って働いていました。「人は必ず変わるんだ」という希望です。しかし、中には変わらない人もいます。変わらない人もいるのです。そんなときに神様は、「変わらなくてもいいんだよ。それでもあなたは大切な存在なのだ」という、創造主としての愛の中で私たちを包み込んでくださるのです。

パウロは、自分たちを神のように扱おうとするギリシア人に対して、こう言いました。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません」。私たちだって、あなたがたと同じ人間に過ぎないんだ。誰が偉いとか、誰が神だとか、そんなことはありえない。ただ天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られたお方だけが、まことの神なのだ。パウロはそう言って、生ける神をギリシア人に宣べ伝えようとしていました。ところが、アンティオキアやイコニウムから来たユダヤ人たちが、それを妨害しようとしていました。ユダヤ人たちは、自分たちだけがいつまでも神様から選ばれた民族、神の民でありたかった。だから、異邦人に福音が宣べ伝えられていくことに絶えられなかったのではないのでしょうか。

さて、最後に私たちは、最初に出てきた足の不自由な男の話にもう一度戻りたいと思います。彼は、パウロによって歩けるようになりました。そのときパウロは、この男の中に、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認めた、と聖書には記されています。いやされるのにふさわしい信仰。それはどんな信仰だったのでしょうか。ここでは想像するより他にないのですが、この後にパウロが「自分も同じ人間にすぎない」と語る話や、それを妨害しようとするユダヤ人たちとの関連で見ると、この男の人が持った「いやされるのにふさわしい信仰」とは、たとえ足が不自由でも、たとえそのために仕事ができなくても、そんな自分も神様によって造られた人間である、天と地と海とそこにあるすべてのものを造られたお方によって、私も造られたのだ。そういう信仰をこの人が持っていたと考えることができます。生まれつき足の不自由な人は、そのハンディのゆえにその人の内に罪があると考えられていたこの時代に、たとえ何もできなくても、そんな自分でさえも天と地と海とそこにあるすべてのものを造られた神様によって造られた素晴らしい存在のだと認めること。それが、彼が癒されるのにふさわしい信仰だったのではないのでしょうか。

私たちが信じている神様は、天と地と海とそこにあるすべてのものを造られたお方です。私たちがどんな存在であったとしても、たとえ何もできなくても、まわりの人たちから認められなかったとしても、神様によって造られたということが本当に大事なことであり、尊いことなのです。私たちもそのことを信じて歩んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。